

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22401038

研究課題名(和文) 東アジア民俗文化の新たな枠組の構築をめざす基礎的研究

研究課題名(英文) Toward the Reconstruction of East Asian Folk Culture

研究代表者

古家 信平 (FURUIE, Shimpei)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：40173520

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,500,000円、(間接経費) 3,450,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は東アジアの民俗文化の基底に第4の霊的存在を仮定し、これを物質文化研究、儀礼研究の文脈から明らかにしようとする。これまで、東アジアの民俗宗教は神、祖先、祀られない死者の霊という3つのカテゴリーによってとらえられてきた。ここでは日本民俗学でいうところの非人格的な畏れ、あるいは崇りという人々の行為を無意識に規制する霊的存在を前提として、日本本土、南西諸島、台湾、韓国の物質文化資料、諸儀礼を検討したところ、表面的な差異を超えたところでの共通の霊的認識を抽出することができた。

研究成果の概要(英文)：This study focus to analyze the base of the folk culture in East Asia especially on the folk religion captured by God, Ghost and Ancestor. The meaning of the forth category of spiritual existence in addition to the three categories is cleared by the field works in main island Japan, Ryukyu islands, Taiwan and Korea from the context of material cultures and rituals.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：民俗文化 俗信 南西諸島 霊的存在 台湾 中国周縁社会

1. 研究開始当初の背景

(1)平成22年度に本研究を開始した当時、民俗学・文化人類学の分野においては、個々の研究者のフィールドデータを重視し構造論や象徴論が拾い上げられなかった事例を積極的に取り上げるあまり、民俗文化の基底にある共通要素を前提として議論ができにくくなっていた。

(2)東アジア中国周縁社会を一つの範囲として、霊的世界に関する新たな枠組みを提起しそれを積極的に利用した相互理解の必要が感じられていた。個々のフィールドをデータを外に開いて活用していくことにもつながっていくことが期待された。

2. 研究の目的

(1)中国周縁社会の霊的存在に関する議論は、神(God)、鬼(Ghost)、先祖(Ancessor)の3つの領域によって進められたが、本研究では第4の霊的領域を新たに設定し、個別のフィールド研究によっては明らかになしえない霊的世界の理解を目的とした。

(2)これによって、個々のフィールドではそれぞれ別の名称が与えられ、個々の信仰体系の中で自立しているかに見られる現象を相互に比較することが可能になる。そこに各地域の歴史的背景を加味して、東アジアにおける民俗宗教の大きな流れを明らかにしたいと考えた。

3. 研究の方法

(1)中国周縁社会(ここでは日本本土、南西諸島、韓国、台湾を対象とする)は、中国からさまざまな文化を摂取し、それぞれ独自の展開をしてきた。先述の3つの霊的領域に関しては研究の蓄積があるが、ここに第4の霊的存在として提起する領域についてはデータの収集も十分とは言えない。そのため、これら周縁社会において、第4の霊的領域の具体相を観察できる儀礼、呪言などの口承資料、伝説・ことわざなどの文芸資料、物質文化資料等により明らかにする。

(2)次に、それらをふまえて民俗語彙を用いた概念化を図り、比較民俗学の手法を用いた相互の比較対象研究を行う。また、いわゆ

る伝統的な儀礼場面ばかりでなく、現代的様相の中にも霊的要素の読み替えがみられるため、それらも調査対象とした。

4. 研究成果

(1)物質文化資料を生かした儀礼の分析に関して、台湾南部の台南市後壁区の空間辟邪物の資料を用いて分析を行った。調査地の一つ魚寮地区では、主たる廟を中心とした集落内が主神によって外部から守られていることを、五嘗という神兵の配置によって示している。それ以外の石敢当や符呪碑などの辟邪物とともに、航空写真上に示した。緯度・経度の記載により、土地の人々の方位感覚とのずれ、空間認識と辟邪物の配置の整合性を指摘し、儀礼の実施状況を加味して、集落そのものが生活圏の外部から入り込んでくる悪霊などを退ける機能を持った巨大な装置であることが明らかになった。

ここで指摘される辟邪の対象は、神でも先祖でも祀られない死者の霊でもなく、人格を失った畏れとでもいうべき存在である。辟邪の適切な対応をしなかった場合には、そこに居合わせた特定の人に不幸が訪れる。それを避けるための方法も知られている。その方法は法師、巫堂などという霊的職能者によってもたらされる。

(2)邪の悪い影響を避けるための方法を一般の人々に与える職能者を、台湾では法師(ホアス)、韓国では巫堂(ムーダン)などと称している。本研究では両方に聞き取り調査を行った。彼らは自宅などに祭壇を持っており、週に1回など依頼者からの質問に回答する機会を設けている。その機会に録音し、対話の中に見られる第4の霊的存在にかかわる部分を抽出した。

台湾では『通書』を参照しながら依頼者の生まれ年を参照して辟邪のための日を選ぶことができる。出産や転居、死亡などによって何種類かの辟邪が必要になり、その発生原因について説明を得た。ただ、個々の霊的職能者によって説明論理が異なっており、その異同については今後の検討が必要である。ライフヒストリーのデータも収集しているので、霊性を身につける過程との対比も試みたい。韓国でも同様の事例の収集にあたり、特定の事例ごとにその対応についてまとめる

ことにした。同じところに複数の人々が行った場合に、ある特定の人だけが不幸に見舞われる事例では、その場の方角などと時間帯、その人の生まれ年などが呼応している。しかし、傾向を見出すためには事例数が少なく、その点で今後課題を残した。

(3) 日本本土および南西諸島の事例については、博物館の特別展等の図録に含まれる霊的存在に関する資料の確認作業を行った。この種の資料には有形の物質文化資料が意味とともに記述されていることがあり、本研究にとって有効に使える。それ以外に民俗調査報告書の祭礼、俗信等の関連部分の収集を行った。

(4) 現代民俗論の文脈で注目される儀礼の検討も行った。台南で行われた鄭成功に従った官兵の英霊と2・28事件で死んだ亡霊を慰撫するための儀礼で、今日の台湾の混乱の原因をこれらの霊が争っていることに求めて実施された。片方を英霊、他方を亡霊と使い分けているところに、主催者の政治的意向が反映されている。5日間の儀礼に仏教、道教、道教的新宗教の3つの宗教団体が加わり、相互の干渉なく進行した。通常の死に方をしなかった死者の霊が恨みや無念を残しているから供養しなければならないとする儀礼の意味は3つの宗教団体に共通しており、功德を儀礼の中核に据えていることはうなずける。一連の儀礼の中に道教儀礼に入れない5つの死に方をした紙の像に茶を飲ませ、塗りつけるくだりがあり、打城を思わせる。こうした点に依頼者側を通した祀られない死者への認識を知るとともに、祭場を守護する神兵の配置を省くなど、ビジネスとしてのイベントの側面を示している。第4の霊的側面を逆に照射している事例として注目できる。道教儀礼を主導した道士には2年にわたって取材してきたので、唐末に成立した道教儀礼の意味付けとの相違についても明らかにできた。

(5) 本研究計画を進めていく中で、新たな着眼点となった事例がある。これまでの研究は儀礼の構造や神観念の解明に関心が注がれてきたが、調査の過程で地域社会の生活に根差しているとされる廟の現代的状況を十

分にとらえ得るかどうか、議論された。そこで選挙という地域住民の意見が分節化され再統合される状況の中で、候補者と廟と地域住民との関係をとらえれば、人々の思惑を反映した多面的な民間信仰の姿をとらえられるのではないかと考えられた。そこで選挙活動の中に見られる民俗のあり方を民俗誌として資料化することとした。

験担ぎが盛んで、選挙事務所は派手な色彩の縁起物に囲まれ、ある候補者の事務所には中壇元帥、媽祖、関羽の神像が安置されていた。数時間かけて電飾や舞台を設けた自動車を連ねて選挙区内をパレードし、爆竹や花火を大量に打ち上げて祭礼の雰囲気醸し出す。そこには事務所に持ちこまれた神像の廟も加担している。廟はコミュニティー性が強い組織で社区型の信仰が多く、利益誘導型の機能をしやすい。道教の神々は現実の力関係を反映し、有力者とのコネクションは廟の権威を保ち、寄進の規模は信心の深さをあらわす。それらが神の威光を最も反映しているように見えるが、験担ぎなどには人知れぬ霊的存在への畏れを認めることができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計20件)

松本浩一、宋代の考召法、知のユーラシア、査読なし、4巻、2014、181 - 205

武井基晃、系図と子孫 琉球王府の家譜の今日における意義、日本民俗学、査読有、275号、2013、14 - 34

丸山宏、道教功德戲敵唱道文化、宗教生命關懷国際学術研究会手冊、査読有、1巻、2013、227 - 246

徳丸亜木、口頭伝承の動態的把握についての試論、現代民俗学研究、査読有、5巻、2013、15 - 31

古家信平、カラダが語る人類文化、国際常民文化研究機構国際シンポジウム報告、査読なし、2巻、2013、157 - 160

武井基晃、祭祀を続けるために 沖縄の先祖祭祀における代行者と禁忌の変容、現代民俗学研究、4巻、2012、9 - 24

武井基晃、系図をつなぐ 屋取集落の土族系門中による系図作成の実例、沖縄民俗

研究、査読有、2012、65 - 105

丸山宏、道教伝度奏転儀式比較研究、中国
地方宗教儀式研究、査読有、1 巻、2011、
637 - 657

徳丸亜木、信仰 歴史、外部、個人、そし
て内面、日本民俗学、査読有、262 号、
2010、106 - 135

[学会発表](計4件)

武井基晃、家譜を読む子孫たち 琉球王府
士族の門中、日本民俗学会 865 回談話会、
2012 年 11 月 11 日、成城大学

松本浩一、道教会元家登載的雷法實際上様
実行、文学与宗教系列仙台座談会、2010 年
8 月 5 日、台湾中央研究院文哲研究所(台
湾)

6. 研究組織

(1)研究代表者

古家 信平 (FURUIE, Shimpei)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：4 0 1 7 3 5 2 0

(2)研究分担者

松本 浩一 (MATSUMOTO, Koichi)
筑波大学・図書館情報メディア系・教授
研究者番号：0 0 1 6 5 8 8 8

徳丸 亜木 (TOKUMARU, Aki)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：9 0 2 4 1 7 5 2

丸山 宏 (MARUYAMA, Hiroshi)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：0 0 2 2 9 6 2 6

武井 基晃 (TAKEI, Motoaki)
筑波大学・人文社会系・助教
研究者番号：0 0 5 6 6 3 5 9